

演題：医療DXと論文作成、 およびRS_Base連携糖尿病診療の紹介

所属：げんだいクリニック

氏名：李 源台 先生

第81回全国臨床糖尿病医会学術集会 日時：2026年4月12日（日） 会場：第一ホテル両国5F 北斎

本講演では、当院におけるRS_Baseを中心とした医療DXの実践と、それを基盤とした糖尿病診療および論文化の取り組みについて報告した。

医療DXというと大規模なシステム導入を想起しがちであるが、実際の診療現場では「どこから手をつけるか」が最も難しい課題である。私自身も当初は漠然としたイメージしか持てず、最初の一步に時間を要した。しかし実際には、個々の診療データを整理・蓄積し、それを「ワンクリックで取り出せる形」にすることがDXの本質であると考えている。

当院ではRS_Baseを用いて、眼底写真、神経所見、検尿、生化学検査など多岐にわたるデータを一元管理している。これらのデータは患者ごとに時系列で整理され、ワンクリックで一覧表示が可能である。例えば眼底所見は過去画像と並列表示でき、進行の評価が直感的に行える。また検尿や生化学検査は測定機器から自動取り込みされ、人的入力を介さず即時にデータベースへ反映される仕組みとしている。これにより入力作業の削減だけでなく、ヒューマンエラーの低減にも寄与している。

さらに、体重や血圧、HbA1cなどの経時的変化は自動的にグラフ化され、薬剤変更や生活指導の効果を視覚的に評価できる。eGFRについてもクレアチニンおよびシスタチンCの両者を同時表示し、腎機能の変化を多面的に把握できるよう工夫している。これらの可視化により、患者への説明が容易になるだけでなく、診療判断の質向上にもつながっている。また、診療データはExcel等へ容易にエクスポート可能であり、集計・解析を経て論文化へとつなげることができる。すなわち、日常診療で蓄積されたデータが、そのまま研究データとして活用可能な構造を構築している点が特徴である。従来は論文作成のために改めてデータ収集を行う必要があったが、このような仕組みにより、診療と研究の連続性が担保される。

CGMデータの活用においても同様であり、数千から数万件に及ぶ生データをRS_Baseに取り込み、ワンクリックでTIRなどの指標へ変換する仕組みを構築している。さらに、従来の5段階評価に加え、独自に細分化した指標を用いることで、より詳細な血糖変動評価を可能としている。これらの処理は診察中に数秒で完結し、臨床意思決定に直結する情報として活用できる点が大きな利点である。

神経障害評価においても、従来は紙ベースで行われていたモノフィラメント検査や振動覚検査をデータベース化し、経時的変化を可視化している。これにより、足病変の進行リスクを早期に把握できる可能性が示唆された。

さらに、当院は九州糖尿病データベース研究会(KDDS)に参加しており、多施設共同でのデータ解析および論文化を行っている。これまで複数の学会発表および論文掲載に至っており、診療データの標準化と共有が研究推進に重要であることを実感している。

一方で、DX導入には課題も存在する。特にシステム構築には一定の試行錯誤が必要であり、すぐに完成形に至るものではない。また、現場に適合しないシステムは逆に負担となるため、自施設の診療スタイルに合わせて柔軟にカスタマイズすることが重要である。

以上より、医療DXの本質は「データを蓄積すること」ではなく、「使える形で取り出し、診療と研究に活かすこと」にあると考える。RS_Baseを中心とした当院の取り組みは、特別な設備に依存するものではなく、現場の工夫の積み重ねによって実現可能である。今後も診療と研究をシームレスに結びつける環境を整備し、より質の高い糖尿病診療につなげていきたい。